

第29回岐阜大学獣医臨床セミナー 教育講演（名古屋市獣医師会と共催）

期日：2013年10月27日（日） 14：00～17：00

場所：名古屋市獣医師会館

<http://www.animalhospital.gifu-u.ac.jp/>

がんを知り，がんを減らす —犬がん登録を「岐阜県」からはじめよう—

丸尾幸嗣

岐阜大学動物病院腫瘍科・比較がんセンター

はじめに

家庭犬において、がんの動物は確実に増えていると実感している。また、岐阜大学動物病院腫瘍科での二次診療では進行がんが多く、現状で最善の治療を実施しても完治できない場合もある。しかし、がん診療の最前線で日々がんの症例と真摯に向き合い、戦っていくことは、臨床家として最優先すべき使命であることはいままでもない。その努力の積み重ねは、がんの動物とその飼い主に福音をもたらし、がん克服への礎となる。

一方、がんを別の切り口から俯瞰すると、現状の治療法の限界がみえてくる。日々の戦いのなかで、がんによる死を阻止できるわけではなく、わずかの延命を実現することが至上命令と思われる現実があり、釈然としないものがある。たとえば、新規治療法がカプラン・マイヤー生存曲線を描いて統計学的に有意差があったとしてもである。

がんを克服するには、現実の対応だけでは解決できない、常識を超えた壁が存在している。現実のがん臨床の厳しさを認識し、それらを前提にして、しかも視点を変えたアプローチが希求されていると感じる。とくに動物医療においては、がん克服のためのオプションが限定されており、保守的な対応に終始している側面もみられる。治療面では、従来の治療方法に依存するあまり、革新的な治療研究は少なく、それらの開発実績も全体的には不足している。また、ヒト医療において常識となっている

「がん登録」の制度や、「がん疫学」、「がん予防」の研究が、獣医療ではあまりにも不十分である。

がん克服への道には時間を要すると思われるが、本稿では、従来のがん診療の戦いに加えて、がんを知り、がんを減らすためには、がん登録が不可欠であることを強調したい。そして、ヒトにおけるがん登録の歴史と現状を紹介し、続いて岐阜県をモデルとした犬がん登録を開始したので、その概要を報告する。

ヒトのがん登録

世界的にみると、ヒトのがん登録は1929年、ハンブルクの地域がん登録が初めてであり、その後1940年代に米国、デンマーク、カナダ、英国、ニュージーランドで開始され、1950年代にはスロベニア、ハンガリー、ノルウェー、ソ連、東ドイツ、フィンランド、アイスランドでも開始され、それらを契機に世界中に広がっていった¹。

日本では、1951年に東北大学の瀬木三雄教授が初めて宮城県地域がん登録を開始し、1954年宮城県地域のがん罹患率を報告した¹。その後、徐々に各自治体に広がっていき、2012年9月ようやく47都道府県のがん登録が出揃った。岐阜県のがん登録は1995年に開始され、2010年度（平成22年度）には死亡者の約3割ががん死（5,622人）となっている²。2012年度は7月現在までに、14,000件のがんの届出があった。